

---

# 光眼のアジュール

神宮寺飛鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光眼のアジュール

### 【Nコード】

N3554L

### 【作者名】

神宮寺飛鳥

### 【あらすじ】

“祝福の日”と呼ばれた謎の天変地異から数百年後の未来……。かつての文明は崩壊し、生き残った人々は滅んだ都市の残骸に紛れ暮らしていた。かつて“東京”だった街の地下に突如現れた巨大迷宮……。人を蝕み、異形へと変えてしまう“呪いの病”……。差別と偏見、暴力と殺戮が横行する世界で記憶と言葉を失った“主人公”は世界を知る旅に出た。そこで少女は無垢な存在であるが故にあらゆる罪悪を受け入れる。旅を共にするは姿無き“語り手”と、彼女と同じ“呪われた人々”……。全てを失った少女の、全てを再生

する為の旅が始まった。それは神と殺戮者が結んだ、たった一つの契約の物語。短期、不定期連載予定。5 / 14 : 極端にセリフが存在しない小説になってしまった。

(1) 彼の物語は既に遠く

「……わたしね、あなたに逢えて……良かった。あなたと一緒に旅が出来て……本当に、良かった」

まるで後生の別れの様に、彼女は俺にそう言った。俺にも彼女にも似合わない明るく眩い日差しの下……彼女は流れる川のせせらぎに耳を傾けながら空を見上げる。

厚い、とても厚い雲は普段は世界を光から遠ざけようとしているかのようだった。しかし今はまるで彼女の決断を祝福しているかのように、惜しみなく光を降り注がせる。果たしてそれは英断なのか、それとも……。

俺は何も言わずにじっと彼女の横顔を眺めていた。こうして彼女の事を見つめるようになってどれくらいの時が経つただろうか……。思えば長いようで……短い旅だった。

「二人きりに、なっちゃったね……」

寂しげな呟き……。そうして彼女は岩と砂だらけの川原に腰を下ろし、長くしなやかな指先で砂に言葉を描き始める。それは彼女がこの旅で学び、出会った人々の名前……。それは単純な作業だった。そして思い出を小瓶に入れて美しいまま閉じ込めるような作業でもあった。

そうして紡がれる様々な言葉に俺は静かに記憶を遡っていた。そう、彼女はずっと孤独だった……。だが孤独ではあったが、それでも同じ孤独を分け合える仲間達と出逢った。それは仲間と呼ぶのもおこがましいほど、それぞれが身勝手に自分のエゴに振り回される者達だったが……。それでも、“ひとり”を紛らわせるくらいには優しい場所があった。

何人かの名前を紡ぎ、そして彼女は言葉を止めた。今は……本当の意味で孤独の中に沈んでいる彼女が、どうしようもなく狂おしい寂しさと切なさの中に身を置いていた事は俺には直ぐに判った。そうしてどこにいるのかも判らない俺へときよるきよる視線を向け、微笑む。

「ねえ……？ もう、思い出したんでしょ？ 教えて欲しいな……。あなたの、名前」

少し驚いたのは、これだけ一緒に居たというのにまだお互いの名前すら知らなかったと言う事実か……。それとも彼女がそれを知りたがるくらいに成長した事か。あるいは意思疎通の出来るはずのない俺たちが、こうしてさも言葉を交わしているかのように在る事か……。

いや、恐らくはそのどれもが正解なのだろう。そして俺は彼女の言葉に……存在しない唇で言葉を紡いだ。きっと、それは彼女に届いていたと思う。俺の名前を呼び、そして彼女はゆっくりと歩き出した。

「行こう。あなたとの約束を……果たさなきゃいけないから……」

それは……とても長いようであったという間の物語だった。彼女は歩いていく……。愛する全てを失ったとしても、交わしたたった一つの約束を守る為に……。

最後の旅が始まった。俺は彼女にどこまでもただついていく事しか出来ない。波も、風も、全ては俺ではなく彼女次第……。だが俺はそんな旅がそれなりに気に入っていたのだ。そんな事に、今更になって気づいた。

始まりは……とても昔の事のように思える。まだそれは俺に肉体

が存在していた頃……。 “世界の最奥” を目指した一人の愚かな男は、やがて一人の女神に出会った。そしてそれが全ての悲劇と、そして幸福の始まりだった……。

## 光眼のアジュール

「あなたの……名前は？」

女神は俺にそう問いかける。俺は手にした剣を降ろし……そして名乗った。神に願い、そして己の存在の過ちを正す為に。

俺が見た全ての物語を今語ろう。彼女が歩み、そして過ち、血塗られて繰り返してきた、殺戮と懺悔、憎悪と愛の物語を。

(2) そして始まりは運命と共に

『……………気がついたか？』

女はくぐもった声でそう問いかける。しかし意識がはっきりしない彼女はその問いかけに何の言葉もリアクションも返さないまま、大地に敷かれた布の上に横たわっている。

『……………自分の事が判るか？』

二度目の問いかけ。恐らくその言葉の意味は一度目と大して差は無いだろう。少女はそれに反応し、漸くゆつくりと上半身を起こす。しかし途中で力尽きて倒れてしまった。それほどまでに衰弱し、彼女の身体は疲れきっていたのだから……………。

夜の闇の中、傾いたビルが並ぶざらついたアスファルトの上……………。焚き火は女の影を大きくビルに投影していた。パチパチと音を立て、薪が燃える……………。パチンとそれは爆ぜる音が聞こえ、少女はゆつくりと眼を開いた。

少女。そう、彼女は少女だった。だが同時に少年のようでもある。上半身を黒い拘束布の様な奇妙な服装……………いや、或いは防具か……………で覆っているが、それは殆ど面積が無く、傍目から見ると裸と大差ない。一方下半身には白い布を巻き、その下には銀色の鎧が見え隠れしている。この世界の人間のファッションセンスという奴がどんなものなのか俺は知らないが……………少なくとも奇妙な格好であるには違いない。

一方、横たわった少女の顔を覗き込み、瓦礫に背を預けて座り込んでいる女……………。彼女もまた、奇妙奇天烈な格好をしていた。頭にはボロボロの金物のバケツを被り、服装は何故かウエディングドレス

スと来ている。奇妙だった。しかし同時に俺はそれを“別に普通”だとも考えている。

『助けてやったんだから感謝の言葉くらい述べたらどうだ？ 地下迷宮の途中でくたばってたお前を地上まで引つ張り上げるのはそれなりに骨が折れた……。どういっつもりで入り込んだのか知らないが、子供が足を踏み入れていい場所じゃないんだよ、あそこは』

“地下迷宮”という単語に俺は一人で頷いた。ああ、あそこは子供が一人で入れるような場所ではない。大人の屈強な冒険者が数人で入り込んで、余裕で全滅してくるような場所だ。そこに少女が一人で入り込んでいたのだとしたら……。成る程、それは確かにおかしな話だ。

『……………？ おい、大丈夫か？ 頭でも強く打ったのか？ 私の声が聞こえているか？』

女は身を乗り出し、少女の顔色を窺う。白く抜けるような肌……純白の羽のような髪。長い睫の瞼に閉ざされていた瞳が開かれ、女を見やる。少女に表情はなかった。きょとんとした様子でただ女を見つめ返すだけで、何かを口にする気配もない。

『自分の名前が言えるか？ おい、頼むからしつかりしてくれ……！ 赤ん坊じゃないんだ、そんな何もかも面倒見られんぞ！』

女の語気は強かった。しかし少女は何も言葉を返さない。暫く二人の睨み合いが続き……。折れたのは女の方だった。盛大に溜息をつき、舌打ちして瓦礫に背を預ける。腕を組んだまま頷いた女は苛立った様子で言った。

『……ろくでもないガキに関わつちまった。大方、“ケムリ”にぶつ飛ばされて頭でもおかしくなつちまったんだろつな……』

完全にそれは女の独り言だった。何せその場に存在しているのは女と少女だけなのだ。他に言葉を投げかけるような相手は居ない……。俺は周囲を見渡し、それを再認識してから二人を“見下ろした”。

さて……二人の事も気になるが、俺は一体どうなつてしまったのだろうか？ ついさつき気がついたのだが……気づいたら何故かこの様だ。焚き火に照らされビルに浮かぶ影……そこに俺の影は存在していない。そも、肉体がないのだ。俺の意識はふわふわとここに浮かんでいるのだが……肉体が無い。この奇妙な感覚をどう言語化すればいいのか……。

兎に角、俺は気づいたらここに浮かんでいた。そしてある程度自分の意思で動き回れるようだ。さつきからぐるぐると女の周囲を回っているのだが……女が気づく心配もない。身体がないのに動いてるっていうのはどういう事なんだか……。視線も動かせるので少女の寝顔を眺めてみる。整った顔つきだが……。どこかで見たような気がする。いや、見覚えはあるのだが……。それがなんだったか思い出せない。

そこで漸く気づいた。俺は記憶喪失と言う奴になつてしまつたらしい。身体も記憶も失つてしまつたととなると……よもや俺は死んでいて、幽霊のような存在になつてしまつたのだろうか？ いやいや……まさかな。そんな事在り得ないとは断言しないが……いや、やつぱり断言しよう。在り得ない。

一人でウロウロしていた俺はやはり肉体が存在しない、記憶が存在しないという結論に達した。それから……色々と実験をしてみた。そうして判つた事がいくつかが在る。

まず、俺の姿は誰にも見えない。自由に動く事が出来、思考も出来るが何かに干渉する事は出来ない……。つまり触れる、声をかけ

るなどは無意味らしい。そして俺は記憶は失っているが、何故かこの世界の情報をいくらか知っているようだ。覚えている……というよりは知っているという方がしっくり来る。その差は非常に微妙だが。

そして最後に、俺の存在はどうやらこの眠っている少女に依存しているらしい。さつきから遠くに移動しようとしているのだが、あの程度この場から離れると良くわからない力に引っ張り戻されてしまうのだ。そうやって引っ張り戻されながらこの周囲をぐるりと回ってみたのだが、その中心はこの少女である事が判明した。

ひとしきり思いつく実験を終えてしまうと、暇という名の沈黙が訪れた。俺は空中にふわふわと浮いたままなのでまるで疲れというものが無かったが……とりあえず女の傍に降りて休む事にする。一切眠気を感じないので……どうも眠る事は出来ないようだったが。

空を見上げると、分厚い雲が月明かりを消してしまっていた。この世界はいつもどんよりと暗闇に沈んでいるイメージがあった。実際、晴天の日など年に数えるほどしかないだろう。今日も天気は曇り……。後に雨にでもなるかもしれない。女はそれがわかっているのか、荷物は既にまとめてあった。

『全く……。気が狂ったガキの面倒なんか見ている暇はないってのに……』

そう呟きながらも女は立ち上がり、そして眠る少女の身体に自分の分の毛布をかけていた。思うに……このバケツ女は口が悪いだけで根はお人好しなのだろう。そうでなければわざわざ地下迷宮から死に掛けた少女なんて拾ってくるはずもない。

しかし俺が見た限りでは少女には外傷と呼べるものが一つもないのだが……何が原因でこんなに衰弱しているのだろうか。迷宮で迷い、行き倒れたか……。まあ、人が死ぬ理由ならばこの世界には探せば腐るほど転がっている。探さなくても……きっと向こうから顔

を出す事だろう。

少女が動けない限り俺はここから離れる事が出来ない……。こうして少女を看病するバケツ女の生活を眺めるだけの俺の日常が始まった。日が出ている内に必要な事はなんでも済ませ、夜は焚き火の影に隠れるようにしてじつと縮こまる……。人の多い集落ならば兎も角、一人旅ならばそれは常識だ。でなければ“ケムリ”に食われる事になるだろう。

人通りもまるでないこの崩落した都市の一面はとても静かだった。あえてこの場所をバケツ女が選んだのではないか？　とも思う。少女を看病するにせよ、もう少しマシな場所というものが在るだろうしな……。

献身的な看病は続き、何かやる度に愚痴を零すバケツ女だったが、それはもう本心ではない事が俺には判っていた。そんなに一生懸命に言い訳しなくても、あんたがいい奴なのはわかってるんだ。雨が降り出せば少女を抱きかかえ、ビルの片隅でまた火を起こす。貴重な食料も殆ど彼女に分け与え、バケツ女はいつも空腹だった。

それでも彼女を看病し続けるのにはきつとバケツ女なりの理由があったのだろう。俺はバケツ女の考えている事はわからないので何とも言えないが……。そうでなければここまで甲斐甲斐しく看病は出来ない。やがて時が経ち、少女が身体を起こせるようになり……。立ち上げられるようになり。そして歩けるようになる頃には、すっかり少女はバケツ女に懐いてしまっていた。

にこにここと、たつぷりの愛情を示す笑顔を浮かべバケツ女のボロボロに古びた、ドロドロに汚れたドレスに顔を埋める少女。困ったような様子で……。顔は見えないが……。しかしバケツ女もまたそれを受け入れていた。二人の年の差がどれくらいあるのかは良くわからなかったが、こうして傍から見ている分には姉妹のように見えない事もない。

『結局、お前は口を利けないままか……。』

少女は顔を上げ、にっこりと微笑む。微笑んでいるだけで……意思疎通が出来ているようには見えない。言葉は意味を成さないのだから。もしかしたら彼女はどこかが壊れてしまっているのかもしれない……。しかしバケツ女はそんな事は関係ないと言わんばかりにその頭をくしゃくしゃと撫で回した。

『お前がなんだろうと関係ないさ。さあ、メシにしよう。今日はご馳走があるんだ』

バケツ女がごそそと取り出したのは……蛇……。のような奇妙な生き物だった。それを握り締めたままバケツ女がビルから出て行く、それに続いて少女もそここ歩き出した。

二人は一緒に近くの水場に向かい、破裂した水道管から延々と水が噴出し続けている一帯で下ごしらえを済ませた。といつても殆ど全部バケツ女がした事で、少女は降り注ぐ水の中をくるくると楽しんで回っていただけなのだ……。少女が移動するようになってはつきりしたが、やはり俺はどうやら彼女の傍を離れられないらしい。彼女が動く俺の身体も自動的に引つ張られるようだ。まあ、身体はないんだが……。

串に刺した謎の肉を焚き火で焼くバケツ女と、それを横でじっと見ている少女。少女は膝を抱え、身体を揺らしながらじーっと燃える炎を眺めている。眼が痛くなったのか、ごしごしと片目を擦る少女……。その様子に思い出したようにバケツ女は立ち上がった。

『そういえば、お前の大事なものを預かっていたんだっただな』

それは、白い眼帯だった。バケツ女は屈んで少女の片目を見やる。少女の左目……。そこからは青白い炎にも似た“霧”がもやもやと煙っていた。

『…………お前も、呪われた存在か』

そう呟くとバケツ女は少女の片目を覆うように眼帯を結んだ。すると鬮は収まり、少女はきよとんとした様子でバケツ女を見やる。女の両腕には黒い布がぐるぐる巻きつけられており、その隙間から隠しきれない黒い煙が揺れていた。

“呪われた存在”　女は彼女を、そして自分をそう呼んだ。女の両腕の肘から先、両足の膝から先は同じように黒い布で覆われている。それは両手両足に“呪い”が発病してしまっているからだ。少しでもその異形を隠そうと、布を巻いて過ごしているのだろう。

この世界ではそう珍しくない事だ。“呪われた病”……それが人間の身体を異形へと変えてしまう。女がバケツを被っているのも、この両手両足に布を巻いているのも、自分の病を少しでも隠したいが為であろう。幸い少女の方は片目以外に病が発症している様子はない。どうやらバケツのほうとくらべ、かなり軽度の呪いのようだ。

『さあ、食おう。おい…………熱いから気をつける…………って、言わんこつちやないな』

串を渡された途端、涎を垂らして謎の肉にかぶりつく少女。しかし物凄く熱かったのか、驚いて串を炎の中に投げ入れてしまう。泣きながら口を抑える少女…………。その様子に溜息を漏らし、女は自分の串焼きを吹いて冷ました。

『いいか？　こうやって…………ふー、ふーっとするんだ。ほら、やってみろ』

「……………」

少女は良くわかっていない様子だったが、真似をするようにふーし始める。それでもまだ熱いのは判っているので……女は呪われたその指先に生えた鋭い爪で肉を千切り、小さく食べやすくしてから少女の口の中にそれを放り投げた。

『ほら、美味しいか？』

もぐもぐとそれを咀嚼し、少女は表情をばあつと輝かせた。どうやら……あんな良くわからない肉でも美味しかったらしい。女は黙って肉を小さく切り分け、それを少女に食べさせていた。餌を待つ小鳥のように口を開けている少女に肉が与えられていく……。成る程、姉妹というよりはむしろ母子と言ったところか……。

自分の分を全部少女に食べさせると、バケツ女は確かに微笑んだ。表情は見えなかったが……これだけ一緒に居てずつとバケツ女を観察していたのだ、俺にはわかる。そうして寢床の準備を済ませ、少女を寝かしつけると……珍しく月の出た夜、女は荷物を纏めて立ち上がった。

何も言わずに去っていく女……それを俺はじつと見詰めていた。後をつけてみると、女は何度も何度も振り返り足を止めていた。余程、あの子の事が気になるのだろう……。だが、女はゆっくりと、ゆっくりと立ち去っていく。それが……彼女の選択だったのだろう。傍に漂いながら俺はこれまでの日々の事を思い返してみた。バケツ女は決して裕福なわけではなく、そのみすばらしい外見からも判るように常にギリギリの旅を続けていたはずだ。“呪われた身”で生きていくという事はそういう事なのだから……。だが彼女は少女を助け、そして何とか自分一人で動けるくらいに回復するまで面倒をみたのだ。もう、関わってやる筋合いもないのだろう。

なら……どうして立ち止まっているのだろうか？ 月明かりがバケツを照らし、雲の合間から差し込んだ青白い光が女の寂しげな影を浮かべていた。感情に呼応するように呪われた黒い手足が煙り……

…女は迷いを振り切るように振り返り、そして一気に走り出そうとした……その時だった。

駆け寄ってくる小さな足音があった。あれだけ爆睡していたのに、バケツ女が居なくなつた事に気づいて追いかけてきたのだらう……。少女は泥だらけの姿のまま、まだ回復しきらない体力のまま、一生懸命に走って来る。バケツ女はそれを見つめ、ぎゅっと拳を握り締めた。

少女が石に躓き、盛大にすっ転ぶ……。バケツ女はそれでも駆け寄らなかつた。少女は自分の力で立ち上がり、涙を拭って走っていく。きつと……。女はともつらかつただらう。それでも声を張り上げたのは、きつと単に彼女の為を思ったからだ。

『来るんじゃない!!』

びくりと背筋を震わせ、少女の足が止まる。二人の間にある距離は僅か数メートル……。しかし、少女はそれ以上進む事が出来ずに居た。バケツ女の呪いは漏れ出し、赤黒い炎にも似た霧が女の身体を覆いつくそうとしていたからだ。

『私に近づくな……! 私と一緒に居てはいけないんだ……! 私は……お前の何倍も濃い呪いに犯されている。近いうちに……“ケムリ”に成り果てるだらう』

何を言っているのか全く判らない少女はただ悲しげな眼差しを向けるだけだ。だが……女は辛くても少女を突き放す必要を感じていた。もう、誰も犠牲にしたくない……。紅い瞳がバケツの穴の奥で輝き、そう物語っていた。

『近づけば、お前を殺す……』

しかし少女は言葉がわからないのか、ゆっくりと走り出した。それを見て女は齒軋りし　振り上げた巨大化した片腕で大地を抉った。衝撃と共に赤黒い炎が爆ぜ　アスファルトは一撃で吹き飛んでしまう。衝撃は少女にも確かに伝わった。コテンと転び、尻餅をつく少女……。バケツ女は文字通り、化け物の力を少女に見せ付けたのだ。

『近づくなと言っているんだ!!　私は本気だぞ!?　お前をズタズタに引き裂くくらい、この呪われた腕ならば造作も無いッ!!』

語気を荒らげる女。少女はゆっくりと立ち上がり……。そうして眼帯でふさがれて居ない眼からいつぱいの涙を零した。ゆっくりと……。また、歩き出す。異形そのものであるバケツ女へと、歩みを進める。もう一度女は大地を吹き飛ばした。少女は転ぶ。しかし……。また立ち上がって歩き出すのだ。

『　何故だッ!!』

それは女の心からの叫びだった。少女は思い切ったように走り出す。そうして真っ直ぐにバケツ女へと突っ込んできた。それを吹き飛ばそうと片腕を上げるバケツ女……。しかし、腕は振り下ろせなかった。バケツを被っていないければ、どんな顔をしていたらだろうか……。月明かりの下、少女はバケツ女の身体をしっかりと抱きしめ、身体を震わせながら何度も何度もその頬を彼女の胸に擦り付けていた。

振り上げられた腕が徐々に縮小し……。そうしてだらりと降ろされる。バケツに空けられた二つの穴から覗く、彼女の紅く輝いた瞳の光が消えた。そうして頬を伝った涙はバケツから零れ落ち……。見上げる少女の頬に落ちた。

『……………ついてきちゃ、だめだ……………』

掻き消えてしまいそうな声だった。普段の強気なバケツ女の口調からは想像もつかないような……………悲しい、とても悲しい声だった。

『私と一緒に居ちゃ……………だめなんだよ……………』

その言葉の意味……………そして彼女の涙の意味を俺たちはまだ知らなかった。しかしやれやれ。とりあえずは一件落着という事か。内心彼女が殺されるのではないかと少しばかり危惧していた俺はゆつくりと二人に歩み寄る。足はないんだが。

降り注ぐ光の中、バケツ女は少女の身体を強く強く抱きしめていた。呪われた腕で、少女の白い肌を抱く……………。それはきつと赦されない事なのだろう。誰よりも彼女自身がそれを赦してはいない。そう、全てはただの“気まぐれ”だったのかもしれない。

この少女を助けた事も……………。少女と共に暮らした事も……………。彼女は彼女の理由があり、そしてその旅路の途中で起こしたちよつとした気まぐれ……………。しかし今はどうしてもそれを手放せなくなってしまった。何も言わずに立ち去ろうとしたのは、その温もりを失う怖さと向き合う事が出来なかったからだ。

弱い……………そう思った。だが、弱いからこそ二人は手を取り合う事が出来るのだ。こうして共に二人は歩き出した。呪われた黒い指先で、獣のように長く伸びた爪で、傷つけてしまわないようにそつと少女の手を握り締める。しかし少女は“傷つけてもいいんだよ”と言うかのように、煙る手をぎゅっと、強く握り締めた。

『……………どうなっても知らんぞ、クソガキ』

バケツ女のその声はとても優しかった。少女は女の腕を取り……………二人は共に歩き出した。俺は振り返り、二人が立ち去っていくかつ

て栄華を極めた街の成れの果てを眺めた。

数百年前、ここには優れた文明があり、数え切れない程の人々が行きかう街があった。だが今は何もかもが廃れ、壊れ、朽ちている……。少女の移動に引き摺られるように俺の身体は移動を開始する。遠ざかる街……。そして“迷宮”。一人でその事を考えながら。

二人は仲良く手を繋いで歩いてきた。あのトボけた少女も、きつとバケツ女が一緒ならば何とか生きていけるだろう。問題は……。俺のこの状況だ。他人の心配をしている余裕は無いらしい。はてさてどうしたものか……。

まあ、別段今の所する事もないし、焦ったところで身体が手に入るわけでもないのだ。とりあえずは彼女たちの旅に同行し……。その様子でも眺めて暮らすとしよう、そう心に決めた。そうして俺と……彼女たちの旅が始まったのだ。

この出会いの出来事の直後と言えば、真っ先に思い出されるのがあの出来事……。里帰りをした、バケツ女の故郷でのお話だ。さて、次はその記憶でも語るとしようか。

(3) 闇は嘆きと共に訪れ

“この世界”はもう、“不平等”から開放され……平らな大地が果てしなく続く煉獄と化したのだ。そんな事を口にする、誰かの事を思い出した。

それは、俺の中にある誰かの記憶……。単純に考えれば俺の記憶なのだろう。実際俺の中にはいくつかの記憶があり、今も少しずつ突拍子もなく何らかの切欠でポンと記憶を思い出したりもしている。完全な記憶の喪失ではないのならば……このまるで他人の物語を思い返すような感覚も、きつと肉体を失った齟齬から来ているのだろう。

“祝福の日”……誰がそう呼んだのか、その言葉だけが世界を独り歩きし始めたのはいつ頃からだっただろうか。人から人へと口伝で伝えられたその伝説は、数百年前に起きた想像を絶する悲劇を伝える物語だ。かつてこの荒廃した世界には……栄華を極めた人の世界があった。

群れを成すビルにはいつぱいの人が詰め込まれ、このアスファルトの大地の上を数え切れない人々が行き来した。人は馬でも牛でもなく、機械の箱に乗り込んで移動し、空を鋼の鳥が飛び回り……。そんな、夢物語のような世界が確かに存在していたのだ。その痕跡は今も各所で見る事が出来る。そう、この世界は……とても幸福に満ちていたのだ。

人が生きる世界である以上、そこに楽園などは在り得ない。だが、それでも整備された“法”と“技術”は人に様々な恩恵を与えた事だろう。かりそめの上とは言え、与えられた物とは言え、バランスは世界を司り、守り、そして人々に長い長い夢を見せ続けた事だろう。それが終わってしまった今でも……消えてなくなる事は出来なかつた沢山のモノがその名残を現代に伝えている。

空は常に厚い雲で覆われ、太陽の光は遠ざけられた。地上は冷え

た場所となり、作物は育たなくなった。多くの動植物が死に絶え、人間は残ったかすかな文明の力にすがりなんとか生きながらえている。その数を大幅に減らし続けながら……首の皮一枚、終焉という文字を遠ざけ続けている。

たまに出てくる太陽は、一体どれだけの希望を人に与えるのだろうか。少なくとも……俺にとっては邪魔な物でしかない。ちらほらと見え隠れする、手の届かない事がわかっている希望ほどタチの悪いものもないだろう？ 得られないのならば、最初から絶望的に演出してほしい。最初から……姿など見せないでほしい。そう願うのはきつと、俺だけではないはずだ。

バケツ女と少女の旅が始まって数日……。俺はそんな事を一人で考えながらふわふわと浮かんでいた。俺が動こうとしなくとも、少女が動けば自然と引つ張られるのだから、もう本格的にやる事もない。だからこんな余計な事を、わかりきった事を一人で思考し続けているのだ。

少女は相変わらず口も利けないまま、記憶も戻らないままだ。それどころか歳相応とは決して思えない、幼子のような行動を繰り返している。外見からすれば……二十歳前の娘、という所だろうか？ 露出の激しい上半身と鎧に覆われた下半身、そして少年とも少女とも取れない無邪気なその整った横顔が俺の判断を鈍らせている。勿論、女の年齢をズバリ当てられる特技などあるはずもないが……。暫く振り続けた豪雨の所為で停止を余儀なくされていた旅路も漸く再開の目処が立った。身軽な様子で先へ瓦礫の山を進んでいくバケツ女……。一方少女は水溜りの上で一人バシャバシャと足踏みしながらはしゃいでいた。バケツ女の苦行は、もう暫く続きそうだし……。

『何遊んでるんだ、クソガキ。ほら、こっちだ……！』

女が呼ぶと、少女は顔を上げて笑顔のまま女へと駆け寄って行く。

そうしてその胸に飛び込み、すりすりと頬を寄せた。毎度毎度の事だが仲の良い事で……。まるで天使のような笑顔を浮かべられては、女も何も言い返せまい。

『……………本当に手間のかかるやつだな。全く、お前なんか助けるんじやなかったよ』

その言葉と同時に女は少女の手をしつかりと握り締め、歩き出した。全く、口と心が別々に動いているような奴だな……。俺も彼女を少しうらやましく思う。この旅に同行者がいるのは嬉しい事だが、自分を認識してもらえないのでは意味がない。こんなにも“話し相手が欲しい”と強く願った事は恐らく人生初だろう。記憶は……………ないのだが。

この俯瞰にも既に慣れてしまった……。人間の適応能力ってやつは、全く大したものだな……。いや、人間かどうかもわからないわけだが……。さて、俺はこれからどうなるのか……。とりあえずはこの二人についていくしかない。焦った所でどうにもなるまい、急がずこのまま浮いているとしよう。

二人が辿り着いたのは、大きなトンネルを抜けた先にあった小さな村だった。かつての文明の時代に築かれた、半壊した住宅地……。それをつたないながらに補修し、何とか人が暮らせるようにした土地だった。見てくれは悪いが、旧文明の技術で作られた家は頑丈で住み心地も中々……。いや、誰の記憶かはわからないのだが。

『……………。妙だな』

ここが目的地だったのだろうか？ 女は大きな瓦礫の上に立ち、村を見渡している。妙………という言葉の意味は俺にも判った。この村………それなりに立派で規模も大きいのだが………人の気配がまるでない。

いや、気配そのものは確かにあるのだ。家の中に閉じこもって……窓の隙間からこちらをじっと見つめている視線を感じる。少女は相変わらずべつたりとバケツ女の腕にくっついて離れる気配もないが、女の方はこの異常に即座に気づいていたようだ。

『……まあ、いい……。こっちだ。案内しよう』

どこに……？ という俺の疑問は直ぐに払拭される事になった。曇り空の下、大勢の視線に晒されながら女は歩き出す。ここは……彼女の旅の最果てだったのだ。始まりにして、終わるべき場所……故に、目的地。暫く歩いた二人の前にあつたのは……木製の小さな小屋だった。

それは、明らかに周囲の建築物からは浮いた存在感だった。思い切り手作りというか……。建造物として、非常に不細工なのだ。立て付けの悪い扉を強引に押し開き、女はそこに少女を案内する。小屋の中には小さな部屋が一つだけあり、ベッドやテーブルなど本当に必要な最低限の家具が設置され、乱雑に生活雑貨が転がっていた。

何年も……何年も、誰も足を踏み入れていない……。停滞していた空気は、女が窓を開け放つと同時に流れを得て動き出した。風が吹き込む小屋……。ボロ布で出来たカーテンがはためいて……。その影に女は立ち尽くしていた。その胸中たるや如何程か……。俺には判る。何となく判る。いや……。手に取るように、判る。ここは、女の帰るべき場所……。女の……。 “家” だった。

何故彼女が何年も旅をしていたのかはわからない。だが……。生半可な覚悟で生きながらえてきたわけもあるまい。彼女の身体はケムリに呪われ続けている。存在そのものが、呪いに固められているのだ。ここに戻ってくる事も、ここから出て行く事も……。間違いない。一悶着あつたに違いない。

『……懐かしいにおいがする。埃っぽくて、じめじめして……。』

太陽から見放された……我が愛しい牢獄だ』

女はベッドの上に腰掛け、そして部屋の中をきよろきよろと見回している少女を見やった。少女と女、二人の視線が交わる……。少女はまるで母に甘えるかのように女へと歩み寄り、その身体を抱きしめた。

『……ああ。結局ここまで連れてきてしまった。私は……。どこまで愚かなのか……。お前にも言葉が分かるのならば……。知って欲しかったよ。私と共にいる事が、どれだけおぞましい事なのか……。』

「……………」

『いや、いいんだ。お前には関係の無い事だったな……。全く、一人旅が長いと独り言が多くなって困る……。お前に何かを語りかけても……。想いが通じるはずもないというのにな……。』

ドロ水で汚れた少女の白い髪を撫で、女は笑った。笑っていた……。そう思う。バケツで隠れたその素顔はきつと自愛に満ちた表情だったに違いない。俺は……。少なくともそう信じている。彼女は……。見た目は恐ろしくとも、優しい人なのだから。

それから女は小屋の床を開き、地下室からいくつか保存食を取り出して少女に与えた。近くには水道があり、そこで少女のドロだらけの髪を洗ってやった。土が詰まった鎧を丹念に掃除し……。そして拘束具にも似た裸同然の少女に、彼女は小さな箆笥から取り出した服を与えた。

可愛らしいワンピースを合わせては幸せそうに真紅に輝く目を細めるバケツ女……。彼女は満たされていた。この胸に空いた穴を塞ぐ為に続けてきた旅の中で……。安らぎを得ていた。少女は無邪気に微笑み続ける。言葉も判らず。何も判らず。ただ……。果てしなく無

垢なその蒼い瞳が自分を映す事にこの上ない幸せを感じている。まるで誰にも愛されなかった自分を投影し、愛するかの如く……。

夜が来て、二人はボロボロのベッドの上で眠った。それでも砂利だらけのアスファルトの上より寝心地は何倍も良かった。すやすやと眠る少女の頭を太ももの上に乗せ、女は座って壁に背を預けて眠っていた。バケツを脱げば横になって眠れるだろうに……全く、そこまでして隠したい程酷い顔なのだろうか。

俺は眠るという事が出来ないので、一人で部屋の中をうろろろしていた。そうして……ふと、倒された写真立てを見つけた。筆筒の上にあったそれを立てると、そこにはウェディングドレスを着た美しい女性と、その隣に立った優しいような青年の姿が残されていた。紅い……血のように赤い薔薇の花束……。花なんて今のご時世、高価でそうおいそれと手に入るものではないのに……。

それはきつと、男が愛する人に送った大切な贈り物だったのだろう。女はその花束を胸に目に涙を浮かべ、幸せそうに微笑んでいた。そのドレスも……。ああ、旅を続ければ当たり前のように……ボロボロになってしまふ。これがあの女の素顔だったとしたら……隠す必要などなかっただろうに。そう思う……んっ!?

待て、俺は今倒れていた写真立てを立てなかったか!? 一体どうやったんだ……!? もしかして物体に干渉できるのか!? あまりに自然すぎてまるで自覚が無かった! これではどうやったのか判らないじゃないか!

一人で部屋の中、悶々とし続けた。写真立てをどうにか再び倒してやろうと躍起になったのだが……倒れる気配はなく、身体もないというのに俺はすっかり疲れ果ててた。さっきのは……俺の思い違いだったのだろうか……。

すっかり諦め、へろへろとその場にうずくまっていた……その時であった。異常な気配を察知出来たのは俺の身体が既に存在しないからなのだろうか? 五感とは違った……第六感にも似た感覚が脳裏を過ぎった。そして 同じものを感じたのか、同時にバケツ女

が跳ね起きる。

『……………くそ……………っ！ 私は……………こんな事の為にここまで来たわけではないのに……………っ』

女は小さな小さな声で毒づき、すやすやと眠る少女を起こさぬようにとそつと足を引き抜き、窓からすらりと伸びた足を引き摺り颯爽と飛び出していった。脚力もやはり常人とはかけ離れているのか、女の足取りはまるで闇を駆け抜ける獣のようだった。

さて……………俺もついていきたいのだが……………この少女がここで眠っている以上、追いかけるには限界がある。確か百メートルくらいなら離れる事が出来ただろうか……………？ 少女の安全を確認する意味も込め、俺は窓から飛び出し高い場所まで浮かび上がって村全体を見下ろした。そこにあつたのは……………文字通りの悲劇だった。

村から離れた場所にあるこの小屋にも悲鳴が響いてくる。どうも視力も良くなっているらしく、遠い村の景色がはっきりと克明に認識する事が出来た。村には火の手が上がり……………広場を黒い霧の塊が闊歩していた。

“ケムリ”だ……………。俺は心のどこかでそう思った。ケムリ……………呪われた人間。人類の数を減らし続けている化け物……………。胸の奥がざわつくのがわかった。俺は……………俺は、もしかしたら……………。

“黒霧病”……………という病がある。それは原因不明の呪われた病……………。完治する事は絶対にありえない、感染経路不明の病だ。感染した人間は身体の一部がから黒い煙が出てくるようになる。それが徐々に全身へと広がり……………やがて全てを飲み干した時、肉体を失い人間は“ケムリ”となるのだ。

黒い煙に覆われて、それが様々な形状を形作ってはいるもの……………中身……………本体は人間そのものだ。固体によって大きさも性質も違うケムリたちは夜の闇に紛れて人間を襲う……………。だが、こんなに大規模なケムリの襲撃がかつてあつただろうか……………。

考えてみればこの村は“迷宮”に近い……。もしかしたらそれが何か関係しているのだろうか……。？　しかし、ケムリはそれを晴らしてしまう炎や日光の光を極端に嫌い、夜と言えども人里を襲う事は殆どないはずなのだが……。

ケムリは次々に民家の扉を破り、中に入っていく。直後、窓ガラスにべつたりと大量の血液が付着した。ケムリの主食は“人間”だ。やつらは人間を見つけ、捕食する為に生きている……。成る程、村の人々が家から一步も出ないわけだ。これでは外を出歩こうなどという気には到底ならない。

だが　問題はそこにバケツ女が一人で突っ込んでいくというこの状況だ。ケムリが進入していった家から飛び出してきた幼い少年が外で群れているケムリを見やり悲鳴を上げた。ケムリは外に逃げてきた人間をむしゃむしゃと食いちぎっていたのである。おぞましい音と共に飛び散る血と蔓延する死のにおい……。少年がその場に屍餅をついた　その時だ。

紅い目を輝かせ、少年とケムリの間を割って入ったバケツ女がその呪われた腕でケムリの頭を同時に二つ引きちぎった。赤黒い血飛沫が噴出し、少年は完全に恐怖でおかしくなってしまった。へらへらと笑いながら、両親が食い荒らされている家の中に戻っている。バケツ女は止めようとしたが……。遅れて少年の首が跳ね飛ばされる音が聞こえた。

『……クソツ！！　どうして誰も闘おうとしない！？　どうして誰も逃げようと思わないっ！！　お前ら……。ここで全員心中でもするつもりかッ！？』

その声にケムリはどんどん群がってくる。女は両腕から赤黒い霧を漂わせ、その力を扱おうとする。両腕が伸び……。その鋭い爪がより長くせり出される。完全に化け物にしか見えないその異形のまま、女は声にならない声と共に走り出した。

膂力は女の物とは思えない。爪の一振りでケムリを払い、腐った肉をスタスタに引き裂いた。成程、これが女一人で旅を続けてこられた理由か……。呪われた力……。だがそれは彼女にとっては悪い事だけではないらしい。素早く低い姿勢で村中を駆け巡り、次々にケムリを切り裂いていく。気づけば女のドレスは返り血で真っ黒に染まり、バケツを滴る赤黒い液体は女の存在を生臭く彩っていた。

「もういい……。もういいんだ。この村はもう終わるんだ……。何をしても無駄なんだ……」

どこかの家から聞こえてきた情けの無い、無感情な声……。苛立ちながら女は振り返る。だがまた違う家から声が続いた。

「どうして帰ってきたのだ……。ダリア……。お前さえいなければ、こんな事には……」

女を翻弄する声……。それは本当にこの村の人間の声だったのだろうか？ 女はあちこちを振り返り、その苛立ちを発散するかのようになり大地を爪で吹き飛ばした。すると声が聞こえなくなり静かになった……。それは、一瞬の事だったが。

「おお、来た……。滅びが……。ああ……。っ！」

「死ぬんだ……。みんな死ぬんだ……」

「殺してくれ……。もういつそ殺してくれ……！」

自分勝手な失望の音があちこちから響き、ノイズとなって村に響き渡る。命乞いをする声……。絶望を嘆く声……。何もかもを諦め無心に帰った声。様々な声が織り成す失意の旋律を背後に、大きな足

音が近づいていた。

振り返った女は驚愕のあまり声を失った。村の入り口にあった小さな門を軽々と踏み壊し、広場に走ってくるそのケムリの大きさをやるや……。俺も驚いている程である。四速歩行をする巨人の影……。全身に紅い瞳を浮かべ、体中のあらゆる場所からケタケタと奇妙な笑い声を上げるバケモ。それは一斉に雄叫びを上げ、バケツ女へと襲い掛かってきた。

飛び上がり、そして落下……。それだけで大地が陥没し、アスファルトがめくれ返る。女は跳躍して民家の上に逃れるが……。巨大なケムリはビルの壁へと跳躍、へばりついて首をぐるりと回し、標的を定めたとわんばかりに女を見下ろしている。

長く、モヤモヤとしたケムリが織り成す赤黒い舌がチロチロと覗く……。あれは……。本当にケムリなのだろうか？ ケムリの中身は変異した人間……。それだけのはずだ。ケムリは確かに人を食うバケモノだが、あそこまで巨大な人間などいるはずもない。こんなものがうつついていたのでは……。絶望したくなるのもわからなくはない。女目掛け、長い下が発射された。発射……。という言葉が非常にふさわしい。その切っ先は彼女が立っていた民家の屋根を吹き飛ばし、巨大な鞭のようにしなる。女は跳躍して回避したが……。空中にいた所を舌で叩かれ、大地へと叩きつけられた。一度激しくバウンドし……。女の全身から鈍い音が漏れる。驚くほど大量の血を吐き出し、激痛の中で女はのた打ち回った。

巨大なケムリはまるで女をいたぶり楽しむかのように、舌先を揺らしながらケタケタと一斉に笑い声を上げる。ああ……。そういうことか。そうなのか。俺はわかってしまった。あの、ケムリは……。あの黒い霧の鎧の、中身は……。

『……ざけんじゃねえ……。ぞ……。っ！』

女はふらふらと立ち上がる。俺はそれが驚きだった。あんな傷を

負って、まだ動けるといのか……。見れば黒い霧が彼女の外傷を修復しているではないか。そこまで……。そこまでバケモノに寄ってしまった存在だといのか。そして……。それでもなお、歯が立たないといのか。

ケムリが壊した門の巨大な岩のブロックを拾い上げ、巨大化した腕で投擲する。それは弾丸のように高速でビルへ向かったが、見た目とは裏腹に軽い身のこなしで回避したケムリは民家の一つの上に落下する。踏み潰され、中からはぐしゃりと血と肉が爆ぜ、悲鳴……。というよりは奇妙な鳴き声のようなものが響き渡った。女は舌打ちし、声を上げもう一度岩を投げつける。それは舌先で射抜かれ……。そのまま矢のように放たれた舌は真っ直ぐに女の胸を射抜き、背後の壁に刺さって女を串刺しにした。

身動きがとれず、声にならない声と空気の抜ける音を喉から搾り出す女……。いくら頑丈な身体と言えども、あんな攻撃を受けては持たないだろう……。しかし女は執念強く舌をがちりと両腕で掴んで言った。

『私は……。私は、お前らなんかの為に死んでやらない……。！ 私は、自分で選んだ場所で……。ゴホッ！』

咽る女の口から血が飛び出す。だが呪われた両腕に込めた力は抜かなかつた。硬質化したその舌の槍を胸から強引に引き抜きながら、言葉を続ける。

『……。自由に生きて、自由に死ぬ……。！ その権利が、私にだってあるはずだ……。っ！ お前らに私の人生の全てを……。！ 呪われた……。ものに……。！ されて たまるかあああああああッ  
！……！』

血を派手にぶちまけながら女は引き抜いた舌をしっかりと掴んだ

まま、身体を反転。大地をが音を立てて陥没するほどの力を込め、思い切りそれを引つ手繰る。ケムリが悲鳴を上げ。その身体が引き摺られる。自らの何倍もの大きさを誇るケムリを引き摺り、女は血がべつとりと張り付いた前歯を噛み締め、その舌を根元から思い切り引っこ抜いた。

街に轟くいくつ物悲鳴。高い声、低い声、しわがれた声、無邪気な声……。全てが声、声なのだ。ケムリの周囲にあつたモヤが一瞬晴れ……。その中身が露になる。

それは、肉の塊だった。肉と肉が絡まり、融和し、人の形を作っている。赤子や、老人や、男や女が呪われ、呪われ、呪いの果てに一つになって言葉も意思も失った姿……。やがて数え切れない口から吐き出される煙が再び奴の身体を覆い尽くす。女は……。引きちぎった長い下を投げ捨て、肩で息を続けていた。

肺がつぶれたのか、上手く呼吸が出来ていない。口からも鼻からもボタボタと血が流れ続けている。女の足元には……。信じられない量の出血が水溜りを作っていた。女もきつと驚くだろう。それが全部、自分の血なのだ気づいたならば。

女は死ぬ……。それはもう目に見えて明らかだった。だがそれでも女はまた前に歩き出す。この村は滅ぶだろう……。あの巨大なバケモノの腕かいなにて……。大穴の開いたウェディングドレス……。それを指先でなぞり、女は寂しげに笑っていた。

あいつの人生は……。幸せな物だったのだろうか？ 俺には彼女の過去までは判らない……。判つてやりたくても……。わからないんだ。一緒に闘つてやりたくても……。闘えないんだ。何故俺には身体がないんだ！ あんなにも頑張っているやつがいるのに……。生きようとしているんだ。どんな自分でも……。それを受け入れようとしているんだ！

俺は窓から小屋の中に戻り、まだ眠り続けている憎らしい小娘の身体に腕を伸ばした。しかし……。すり抜けてしまう。お前が動いてくれないと、あそこまでいけないんだ。お前を守ってくれた大事

な人が……死んでしまっただ。起きてくれ！ 目を覚ましてくれ！  
俺を 彼女のところに連れて行ってくれ！！

「……………」

その、祈りが通じたのだろうか……。少女はゆっくりと瞼を開き、身体を起こした。傍にバケツ女がない事に気づき……。慌てて走り出す。そうだ、走れ。走るんだ。お前の大事な人を守るんだ。俺はお前と一緒に行く。やる事もないしどうすればいいのかもわからないけど、俺はお前らをずっと見てきたんだ。

たった一週間……。二週間……。たかがそれだけの付き合いだ。ああ、そうだ。けれども俺は 俺は、お前たちと一緒に旅をしたんだ。だから……。だから、勝手な申し出かもしれないが……。仲間だって、そう名乗ってもいいと思うんだ。お前らは どう思うか、わからないけれど。

俺は飛ぶよ。お前がそこに向かってくれるなら、ずっとずっとついていく。お前のそのおぼつかない足取りを、傍でずっと見ていてやる。だから……。走れ、走るんだ！ 名前も声も知らない“誰か”よ……。！ お前の為に……。お前自身の為に、走れ ！

ふらつく女に巨大なケムリが迫っていた。女は諦めたように……。しかし決して引かず、その両腕を構える。血塗られた黒い布が風に揺れ バケモノはその巨大な腕を振り上げる。あれでは文字通り、ぐしゃりとつぶされて一環の終わりだ。

どうにか……。どうにか助けたいと思った。身体も持たない記憶も持たない俺がそんな風に思うのは場違いだって言うのはわかっている。だが……。助けられるのなら助けてやりたい。当たり前だろう？ 見てきたんだ。見ていたんだ。これからも 出来れば、ずっと。

振り下ろされる腕……。衝撃が広がった。だが……。目を瞑っていた女の身体は無事だった。女はさぞかし不思議だっただろう、ゆっ

くりと顔を上げ……目の前にあるものを凝視する。それは 青白い霧で包まれた十字架が……大地から無数に生える景色だった。

燃える蒼い炎は振り下ろされたケムリの腕を貫き、それだけでは飽き足らず黒い煙を燃やして侵食して見せる。片腕の中身が露出し、ケムリはそれを庇うように腕を引っ込めこちらを見つめた。同時に 女もまた振り返る。

肩で息をし、少女はバケツ女の傍に駆け寄った。そうして血塗れで傷だらけのその姿を見て……酷く憤慨した様子でわなわなと身体を振るわせた。制御出来ない感情をそのまま晒すように叫んだ少女は、左目の眼帯を吹き飛ばし燃え盛る蒼い眼差しでケムリを射抜いた。

少女の上半身が蒼い炎で覆われていく……。それは拘束具だけで覆われていた彼女の素肌を守るヴェールとなつて風にはためいた。手の中に浮かぶは無数の魔方陣。それを束ね 少女は“闇”を引きずり出した。

手にした物は、蒼い炎を纏った巨大な巨大な斧。少女の身長 の二倍はあろうその巨大な斧を両手で構え、ケムリのようなうめき声を上げながらバケモノを見上げた。ああ、言葉がわからなくなつてお前の気持ちは分かる。お前は……今とても“怒っている”んだらう？

そうだ、少女は怒っていた。大切な人を傷つけられて、怒っていた。今まで一度として怒る事を知らなかった少女……その心の中に芽生えた闇。それを隠そうとも、奇麗事で片付けようともせず……。純粹な、本能的な殺意を手に少女は駆け出した。蒼き。禍々しい、闇と共に……。

(3) 闇は嘆きと共に訪れ(後書き)

くここにこ！ アジユール劇場

\*最早なんでもいいんだろ？ 前につくのはさ……\*

主人公「……………？」

俺「いや、無理だろう……誰も喋れない、意思疎通が出来ない小説で劇場は……と、俺は思った」

主人公「……………」

俺「少女は“ここはどこ？”という不思議そうな顔をしている。それは俺も聞きたいところだが……どうやら夢の中かどこからしいいや、それ以外には考えられない」

主人公「……………」

俺「しかし……まさか名前のないキャラクターだらけの劇場がこんな力オスになるとは……誰も思っていなかっただろうな……」

主人公「……………！」

俺「……………何？ わたしが頑張っこの小説を明るく盛り上げていく……………？ 無理だろう……。タグみたか？ バッドエンドって入ってるぞ」

主人公「！？」

俺「はわわ……そんなの知らなかったあゝ！」という顔をしてい  
る」

主人公「……………?」

俺「いや……………誰に語ってるのって言われても……………。いや……………誰なん  
だろうな……………」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3554/>

---

光眼のアジュール

2010年10月14日19時55分発行